



アジア研究センター 共同研究

「アジアの社会遺産と地域再生手法」公開講演会 報告

2021年7月20日と8月25日において「アジアの社会遺産と地域再生手法」グループでは、オンラインでの公開講演会を開催した。

7月20日は、講師に東京大学大学院新領域創成科学研究科特任助教の柏原沙織氏を迎え「ベトナム・ハノイ 変化する都市の文化遺産」と題し、ベトナムのハノイにおける歴史的景観保全に関するご自身のフィールドワークについてお話を頂き、併せて今後の保全マネジメントのあり方についてお話を伺った。

はじめに、文化遺産の保全対象の広がりについて説明があった。1960年代は点として、1970年代は面として、そして、90年代は空間・界限雰囲気の保全、そして2000年代は動的保全、つまり、変化することを前提に地区を保全していく手法へと変わってきていることから、凍結的な保存ではなく、変化していくことを前提とした、マネジメントのあり方が求められているという。以上の前提より、ベトナム・ハノイにおける説明があった。

ハノイは約900年間にわたる中国支配の後、ベトナムの首都となり、宮廷時代を迎える。その後、19世紀から20世紀半ばまでフランスの植民地時代を経て、第2次世界大戦後は、社会主義化が進んだ。以降、1986年に経済の自由化が起こり経済的な発展を遂げている。

次に調査対象であるハノイ旧市街地の説明があった。当該地区は、歴史的な商住混合地区であり、2004年に地区全体が国の文化財に指定されている。特徴としては、同業者が集まる通りが多くある点であるという。元々は宮廷に物品を納める供給地として手工芸関連の業種が多く集積していたが、現在は、商業や観光業、サービス業がほとんどとなっているという。このハノイ旧市街の有形文化財としては、道路網、町屋(ベトナム、中国、植民地様式)、信仰施設、革命遺産がある。一方でほとんどの通りで建て替え・改造が進んでおり、凍結的な保存には限界があると指摘している。また、無形文化遺産としては、伝統祭礼、伝統芸能、伝統工芸、同業者集積の通り(職業の通り)が

研究分担者 神奈川大学工学部特別助教 上野 正也
あるという。

これらをもとに柏原氏は、経済自由化前後(19世紀から21世紀)における通りに集積する店舗(業種)の変化を調査している。そして、変化の「速度」に着目し、通りの変化にまつわる分類を行っているほか、その変化を表すもう一つの尺度として、元の業種に比べてその内容が大きく変わったか否かを表す「強度」に着目し分析を行っている。

以上より、ハノイ的な変化・経験を継承するためには、職業の通りの機能を維持し、様々な職業の通りが混在状態を維持していくことが求められるという。一方で、近年は、観光業が盛んとなり、その影響を受けて、大きい変化が見られる通りがあるという。柏原氏は、先にあげた変化の「強度」を可視化する分析を通じて、その場所を明らかにしている。

以上の講演を経て、質疑応答が行われた。そこでは、まちなみ景観の変化をもたらす諸要素とそれに対応する方法に関する議論が行われた。



ベトナム・ハノイ旧市街地の通りの様子(柏原氏提供)

8月25日は、講師に(一社)アジア建築集体会長会の李暎一氏をお招きし「ベトナム・サイゴンの建築と都市の文化」と題して、ベトナムのサイゴン(ホーチミン市)における都市計画史と昨今の都市開発に関するお話を伺った。

はじめに、ベトナム全体の歴史の変遷について解説があった。その後、ホーチミン市に関する説明がなさ

れた。ホーチミン市は16区5県1市(政府直轄市)からなる。1区と3区が中心市街地となっており、1区には歴史的建造物が多く存在し、3区は各国の大使館や領事館などが立地するエリアとなっているという。これらを踏まえ、各地区に存在する歴史的建造物(例えば、ノートルダム大聖堂や中央郵便局といったフランス植民地時代を象徴する建物)に関する解説がなされた。

次にホーチミン市の都市計画の歴史に関する解説があった。最初に挙げたのは、18世紀後半に、二人のフランス人技術者によって描かれたフィエン・アン城塞に関する計画についてである。これはヴォーバン様式と呼ばれるイタリア築城術を用いたものであったとされる。なお、この当時に計画された通りが現在にも残っているという。その後、フランス植民地時代における都市計画の説明がなされた。それは、フランス人エンジニアであるコフィン氏による計画(コフィンプロジェクト・1862年)と呼ばれるものであり、50万人の都市が計画されたという。これは完全には実施されることはなかったものの、後世の都市計画に影響を及ぼしたといわれている。

次に紹介があったのは、ベルトゥーによるサイゴンの都市計画である。ベトナムで最初に地形や気候、水空間の調査を行い、それらを計画に取り入れたといわれる。また、計画的には通りと通りに区画された正方形の街区が構想され、かつ、主要道路はサイゴン川から風を受けるよう配置されるなど、環境にも配慮されていたという。さらには、道路の両側に街路樹を多く植えるなど、現在のホーチミンの特徴的な景観はここに端を発しているという。

以上の中心市街地をはじめとした都市計画のほか、新都心計画としてトゥーティエム地区の計画に関して解説がなされた。

当該地区は、都心に近いという理由からも1950年代からさまざまな開発提案があった地区であり、その主な提案計画について説明があった。一つ目は、ホアン・フンというベトナム人が1958年に提案した計画について、二つ目は、C. ドキシアディスによる提案である。C. ドキシアディスは、元々、サイゴンの市街地の開発計画、ベトナム南部の状況に適した住宅モデルの提案のために招聘された。この住宅開発のパイオニアプロジェクトとしてトゥーティエムが選択され、運河ネットワークによる低層住宅が建ち並ぶ都市の提案がなされたという。

ここでは、ベトナムの建築技術や材料を活かすこと

が目指されたほか、多様な層が居住する地域(ベトナム南部)の住まい方を理想としたという。ただし、インフラ等の技術的な問題もあり提案は実現しなかった。

三つ目の計画として、Wurster, Bernadi, Emmons Architects and Planners (WBE)のグループによる提案が紹介された。過去の提案の反省をもとに、当該グループには金融経済コンサルティング会社やインフラストラクチャエンジニアリング会社などが入っていたという。そして、多機能都市モデルという概念で地区が設計された。しかしながら、中心市街地と空間的な脈路が全くないという批判もありながら、結果として当該提案も実現しなかったという。

これらの経緯を経て、2003年に設計コンペティションで優勝したササキ・アソシエイツによる提案が採択され、現在開発が進められているという。

以上の講演を経て、質疑応答が行われた。そこでは、ベトナム(サイゴン)における近年のコミュニティの希薄化に関する議論や、開発に関する都市計画制度について質疑が出されるなど、実務的な視点を踏まえた地区再生手法に関して知見を深めた。

今回は、ベトナムのハノイとホーチミンという2大都市に着目し、都市の歴史の変遷について知る機会を得た。また、変化が著しい都市の動態を踏まえた歴史保全の方法やマネジメントのあり方など、今日的な課題に関する視座・アプローチを共有することができた。さらには、未利用地の大規模な開発といった、アジアの都市特有の状況も知ることができた。このように、歴史保全から都市開発まで同時代的に起こるアジア諸都市について、今後も調査研究を重ねることで、地域再生手法に関する知見を広げていく。



ベトナム・サイゴンの鳥瞰風景(上)・ノートルダム聖堂(左下)・中心市街地の全景(右下) (李暎一氏提供)